

シリーズ3、富山で育つ宿根草の組み合わせとデザイン⑭

職藝学院

教授 渡邊美保子

ルー

ルーは、ミカン科の常緑多年草で南ヨーロッパ原産のハーブです。ヘンルーダとも呼ばれています。中世ヨーロッパでは、古くから宗教的な行事で用いられてきました。たとえば、カトリックのミサの前に、ルーの枝を使い神聖な水をまいたといわれています。また、葉は、消毒用に床に撒くハーブとしても利用されていました。葉の独特の香りは西洋人には好まれ、お茶や料理に使われているようですが、日本人にはなじみのない香りで、ほとんど利用されていないようです。ここでは、園芸品種として、他の花を引き立たせてくれるルーをご紹介します（写真1）。



写真1 ルー 6月上旬

ルーは、苗を植えた一年目は緑色の茎を持ちますが、2年目以降には、根元の枝が茶色く木質化してきます。5月末から6月初めにレモン色の薄い花びらが4枚開きます（写真2）。花の中央の緑色に膨らんだ部分は実になる部分です。まさに、熟す前のミカンの青い実のようですが、よく見ると、十字に溝が掘られているように見えます。この青い実は花びらをつけたまま、一日ごとに大きくなり、直径1cmほどになります。その後、花びらはカラカラに乾いていつの間にか落ちてゆきます。



写真2 ルーの花

その頃になると、溝はどんどん深くなり、くっきりと十字架を刻印したような姿に変化します。キリスト教の信者がルーを神秘的にとらえていたのは、この実の形からかもしれません。

ルーのもう一つの特徴は、青みがかり丸みをおびた切れ込みのある葉です（写真3）。花のレモン色と葉の青灰色は、それだけでお互いの色を引き立たせる関係です。また、葉は、ナミアゲハの幼虫の食草になっています。実が膨らんで重たくなる頃は、ナミアゲハの幼虫が葉にくっついていての頃なので気をつけなければなりません。一見、鳥の糞のように黒く見えるのが幼虫の最初の姿です。まさか、これがあの美しいアゲハになるとは誰も思いません。最後は、愛嬌のある黄緑色の芋虫に変わります。この頃になると、ルーを眺めるのではなく、幼虫が無事かどうか心配でたまらなくなり、毎朝花壇に通うことになります。葉を食べつくしてしまうほどの大食いではありませんので、あたたかく見守りましょう。

ルーは、日当たりの良い場所を好み、寒さにも乾燥にも良く耐えます。草丈は、60cm程度になりますが、6月中旬の梅雨の頃には、実の重みで茎が暴れてきます。実の付いた茎を20cmほど刈り込みますと落ち着きます。ルーの常緑の茎は、冬の間、雪の重みでペッチャンコにつぶれてしまいます。しかし、雪が消えて暖かくなる頃にはいつの間にか立ち上がっています。その生命力には、毎年励まされます。植えられた場所が気に入れば寿命の長い植物です。花壇では、一年中どっしりと構えて、他の植物を見守っているような存在感があります。



写真3 ルーの葉